

科学よもやま話

第2回

科学の地下水脈を育てよう

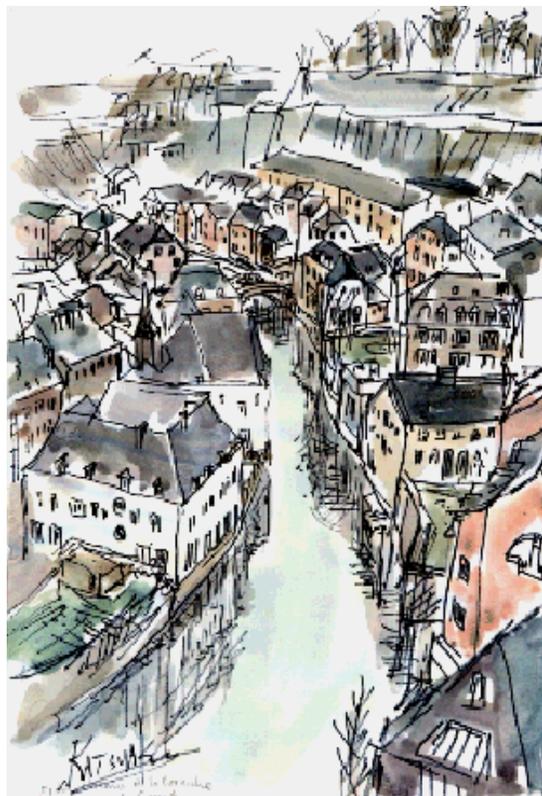


佐藤 勝昭

今回お届けするスケッチは、ルクセンブルグの冬の光景です。ルクセンブルグ大公国はベルギーとフランスとドイツに囲まれた面積 2600km²(神奈川県と同じくらい)人口 43 万の小さな国です。大公の館のある首都ルクセンブルグ市の中心部は周囲を切り立った断崖で囲まれた難攻不落の地にあります。スケッチは、断崖の下にある街グルトの風景です。あまり知られていないことですが、この小さな国はアルセロールという国際的な鉄鋼業を擁する工業国です。また、この国には 200 もの銀行が集まり、国際金融センターの 1 つともなっています。多くのヨーロッパの国は決して大きくないけれど、小粒でもぴりりと辛いサンショウのように、個性をもって独自の生きざまを示しています。

国際的な学会や研究会に出席するたびに感じること、ヨーロッパには科学の地下水脈がとうとうと流れていることです。ヨーロッパの研究者の多くは、流行にあまり左右されず、直接の実用化をめざすことなく独自のフィロソフィーに忠実に、黙々と基礎的な研究を進めているように思えます。そのような地下水脈の中から、予期せぬような発見や発明が湧きだし、その成果が応用に結びついています。例えば、ハードディスクの再生用磁気ヘッドに用いられる GMR(巨大磁気抵抗効果)効果は、フランスの科学者 Fert が純粋に物理的探求心から見出したものです。EU もそのような息の長い研究をサポートしています。長い年月にわたって、科学を育て上げてきた伝統に裏打ちされた自信のなす技でしょう。

わが国の科学技術政策を見ますと、科学技術基本計画にそって科学技術予算は着実に増加しています。科学技術立国をめざすという国家目標のもと、文科省の科学研究費も倍以上に増加しました。JST や NEDO を通じた競争的研究資金も多く用意されました。21 世紀 COE のように次世代の研究拠点形成するための施策もとられ



谷あいの街 (ルクセンブルグ)

ています。しかし、ともすれば即効性のある技術開発に多くの研究費が配分される傾向にあります。一方では、国立大学の法人化にともなって、研究室に配分される研究費は大幅に減少され、競争的研究費が得られない研究者は研究を継続できなくなりつつあります。

研究者の間の競争的環境も必要だと思いますが、次世代技術のブレークスルーにつながるような芽を育てるために、文部科学省は地道な研究にも目を向けて科学の地下水脈を育てていただきたいものです。

- プロフィール 東京農工大学大学院共生科学技術研究院教授
1966 京都大学大学院修了、1966 NHK勤務
1978工学博士学位取得、1984 東京農工大学助教授、1989 同教授(現在に到る)
- 画業 (社)日本画府洋画部常務理事・審査員、個展10回